九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

インドにおける若者の進路選択にみる社会関係 : タミルナドゥ州, 工学系私立大学生の事例

針塚, 瑞樹
九州大学大学院人間環境学研究院教育社会計画学講座 : 助教 : 教育人類学

https://doi.org/10.15017/27425

出版情報：大学院教育学研究紀要. 15, pp.73-89, 2013-03-28. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2012，第15号（通巻第58集），73-89
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.15, 73-89

インドにおける若者の進路選択にみる社会関係

── タミルナドゥ州，工学系私立大学生の事例 ──

針　塚　瑞　樹

1．はじめに

今日の社会を生きる若者の人生経験が，先行世代のものとは大きく異なっていること，社会情勢の急速な移り変わりに伴い，短期間に生じる変化に対応を迫られるような状況を生きている（ファーロング・カートメル 2009）ことは，先進諸国の若者の状況を中心に指摘がなされてきた。これまで，国民の所得格差が大きく，世代による同質・類似の人生経験を前提に議論することができなかった南アジア社会の若者についても，中間層の拡大や高等教育への進学率の上昇を背景に，教育第一世代である若者の意識や生活実態，教育から職業生活への移行に伴う問題など，若者を対象に研究を行う余地が生まれてきたといえる。

社会学・人類学における「インドの若者」を対象とした先行研究には，学歴を有しながらも就職できない若者の状況を教育の不平等の観点から論じる研究（佐々木 2011）や，学歴が就職に結びつかない状況にある若者たちの戦略性についてカーストなど彼・彼女らの社会的位置づけにも焦点を当て明らかにする研究（Jeffery 2008，Jeffery 2010）などがある。若者たちが就職を待ち続け「暇つぶし（Timepass）」の時期を長らく経験していること（Jeffery 2010）や，学歴に見合うだけの就職ができずに「中途半端な高学歴者」となっている（佐々木 2011）といった問題が提起されてきた。学歴を積んでも就職できない若者たちにとって，教育を受けることはどのような経験となっているのであろうか。本稿は，タミルナドゥ州の大学に通う若者の進路選択の場面に焦点を当て，若者の生活実態と意識，社会関係を明らかにすることを目的とする。具体的には，以下の二点について検討することとする。まず，大学生の具体的な学生生活の実態と意識の一端を明らかにする。教育と職業の接続の点から，高等教育修了の資格がもつ機能を検討することは重要である。しかし，本稿では資格が個人にもたらす影響のみでなく，進学のための移住を含む大学生活全般が若者にとってどのような意味があるのかを，若者たちの生活実態と意識に焦点を当て，教育の受け手である若者の視点から明らかにしていきたい。なぜなら，このことは，教育が個人にもたらす多様な意味について検討するうえで重要であると考えるからである。次に，若者の進路選択に関する語りに着目することで，若者の社会関係について明らかにする[(1)]。

以上の二点を明らかにすることで，南アジア社会にとどまらず，多くの地域において同世代の若者が共有する状況と文化によって異なる状況について考えるてがかりとしたいと考えている。教

育，職業生活，結婚などの場面における若者の選択，決定を比較することで，若者の現在から，グローバライゼーションの現象理解と南アジア社会における個人と社会の関係性の現代的特徴を検討する議論につなげていきたい。

２．インドの高等教育 ── プライバタイゼーションの問題を中心に ──

１）高等教育機関の量的拡大とプライベートの機関の台頭

University Grants Commission（以下 UGC）[(2)] によると，インドの高等教育の課題は，第12次５カ年計画（2012－2017年）おける３つの目標の中にまとめられている（UGC 2012）。

＜３つの目標＞

①　アクセスと量的な拡大

高等教育の進学率を2012年までに15％にする。

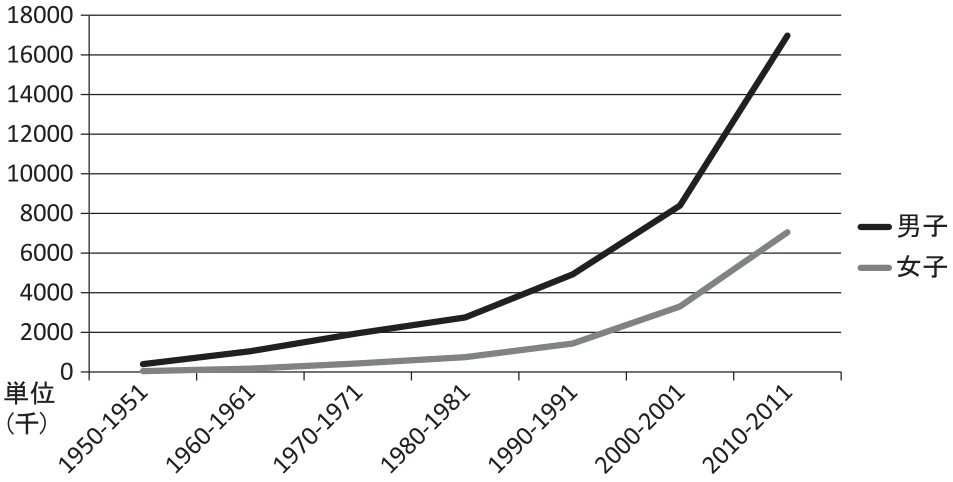
②　平等性とインクルージョン

指定カースト・部族（SC/ST），その他の後進諸階級（OBC），マイノリティ，女子学生に対する財政的な支援を行う。

③　質保証と卓越性

カリキュラム改革，人的資源マネジメント，研究活動の促進，評価体制の確立を行う。

課題とされている高等教育機関の在籍者数の増加であるが，男女の差は依然として大きいものの，在籍率の伸びは2000年以降著しい。



＜図１．高等教育機関の在籍率の推移＞（UGC より作成）

＜表１．高等教育機関の種類別の数の推移＞（UGC2011，Agrawal 2009より作成）

高等教育機関の種類	数（2002＊2003）	数（2011）
Central Universities	18	43
State Universities	178	289
State Private Universities	0	94
Deemed to be Universities	**52**	**130**
Institutes of National Importance plus other Institutes	12	50
Institutions established under State Legislature Acts	5	5
Total	265	611
Total Colleges	＊16,885	31,324
Grand Total	17,150	31,935

高等教育機関には，複数の種類の高等教育機関とその傘下にあるカレッジが含まれている。およそ10年間の機関数の増加は著しく，２倍以上の数に至っているものもある。

Agrarwal（2009）は，独立後インドの高等教育の発展にみられる特徴を，1980年を区切りとして整理している。それによると，1947年から1980年までは，大学とカレッジは政府主導で設立された。また，既存の大学が認可するという形で，多くのカレッジが設立された。しかし，1980年以降は私立主導の高等教育機関の量的拡大が図られ，特に市場の需要があった専門（Professional）分野（医学，工学，薬学，教師教育）におけるコースが増加した。その結果，専門分野では学生のおよそ80％が，私立の高等教育機関に在籍している。

Agarwal によると，1980年以降，政府が高等教育に十分な資金を支出できないなか，需要がある分野で，私立の高等教育機関の拡大が無秩序に，無計画になされている。その問題点としては，プライベートの高等教育機関の多くが商業主義的であり，その教育の質や，アクセスの不平等性，大学による過度な利益追求，学生に対する詐欺といったことが指摘されてきた。プライベートの高等教育機関の拡大が予想を上回る規模で進行したことで，政府の規制や政策が追いついていない。その結果，中には質の高い教育を行う機関があるにも関わらず，プライベートの高等教育機関には，ネガティブなイメージがついてしまっている（Agarwal 2009：29）。

プライベートの高等教育機関は存在自体の是非について議論があるが，現存の機関数，在籍している学生数を考えた場合，そのすべてを政府が代替することは現実的ではないといえる。プライベートの機関の問題を明らかにし，改善していくと共に，アクセスの平等性の観点からも経済的・社会的な背景によって不平等が生じないような，実効性のある制度の整備が求められる。

２）Deemed to be University

管見の限り，Deemed to be University に関する議論は，プライベートの高等教育機関の問題のなかでも少ない。1956年の UGC Act 第３条により，大学ではない高等教育機関の中で，特定の分野で高いレベルの功績をもつと UGC が判断した機関は，中央政府により Deemed to be University とし

て認可されてきた。Deemed to be University となった機関は，独立した機関としての運営が認められ，学術的な地位と大学としての特権を与えられる（人的資源開発省 HP）。Deemed to be University の問題としては，まず，認可を受けるプロセスが，不透明で独断的であることが指摘されている。認可を受けるには，政治的な策略が必要であるとみなされており，Deemed to be University の増加が問題視されてきた（Agrawal 2009：76-78）。

こうした問題が指摘されるようになるなか，2009年８月，人的資源開発省は Deemed to be University 全130校を調査し，これらの大学を A，B，C のカテゴリーに分け，C カテゴリーの大学44校については，Deemed to be University としての資格を廃止するべく供述書を最高裁に提出した。その際に，カテゴリー区分のリストが公表された。C カテゴリーのうち，最多の16校がタミルナドゥ州の Deemed to be University であった。Deemed to be University は，南部のタミルナドゥ州とマハラシュトラ州に多く，この２州は私立のカレッジの割合が最も高い州である。

＜表２．タミルナドゥ州のカレッジの増加（Agrawal 2009より作成）＞

	政　府　立		私立（補助有）		私立（補助無）		合　　計	
	Art & Science	Engineering	A & S	E	A & S	E	A & S	E
1984-85	53	7	134	3	6	0	193	10
2002-03	60	7	134	3	247	212	441	222
2006-07	60	8	133	3	297	254	490	265

３．インドの若者の進路選択 ── タミルナドゥ州，工学系私立大学生の事例 ──

今日インドでは特に，プライベートの高等教育機関の教育の質や，若者の教育から職業生活への移行の問題が指摘されている。これまでなかった私立の大学が急増するなか，若者はどのようにして大学を選択・決定し，どのような大学生活を送り，進路選択に関してどのような意識をもっているのであろうか。また，若者の進路選択の場面において，誰がその選択・決定に関与しているのであろうか。本稿では，高等教育機関のプライバタイゼーションが最も進行しているタミルナドゥ州で，特にプライバタイゼーションが早くから生じていた工学系分野の Deemed to be University に在籍する大学生を対象に，インタビュー調査を行った[(3)]。インタビューの主な項目は以下の三点である。

① 大学進学時の進路選択について
② 大学生活について
③ 大学卒業時の進路選択について

1）調査の概要

インドの南東部に位置するタミルナドゥ州は，インドで最も産業化が進み，人間開発指数が高い州の一つである。C 市は，南アジアへの玄関口として，国際空港を有し，交通網も発達している。数多くの教育機関があり，中でも科学技術，特に IT 分野で活躍するリーダーを輩出している（タミルナドゥ州公式 HP）。T 大学のあるタミルナドゥ州 A 地区は，チェンナイセントラルから24キロ，最寄り駅まで電車で45分ほどである。そこから T 大学まではオートリキシャかバスに乗り換えて20分ほどである。

インタビュー調査はインド，タミルナドゥ州の C 市 A 地区にある T 大学の男子大学生15名，T 大学の学長，教員４名を対象として行った。

＜表３．T 大学の概要（大学の HP，フィールドノートより作成）＞

T 大学	
設立者	Tamil Nadu 州元役人夫妻
設立年	1990年
Deemed to be University の認可を受けた年	2009年
学生数	およそ3000人（女子学生およそ450人）
教員数	およそ260人
学部・学科	学士課程：電気工学，機械工学，電子工学，土木工学 修士課程：工学，経営学 博士課程：工学

- T 大学の学生のおよそ60％が北部出身者，教員の80％が南部出身者である。
- 学費は学科によって異なるが，平均して年間９万ルピー，その他，試験代や企業訪問の費用など，４年間でおよそ40万ルピーが必要となっている。

＜表４．T 大学の最終学年に在籍する男子学生（フィールドノートより作成）＞

仮名	年齢	カースト	宗　教	出身州	言　語	家族構成員（本人除く）
Ajay	23	OBC	Hindu	Delhi	Hindi	父，母，弟，妹，祖母（10年前）
Bhuban	21	General	No particular	Bihar	Bhojpuri	父，母，弟
Akshay	20	OBC	Christian	Tamil Nadu	Tamil	父，母，兄，弟２人
Abhishek	21	General	Hindu	U.P.	Hindi	祖父母，父，母，姉２人
Anil	22	General	Hindu	Jharkhand	Hindi	父，母，弟
Sanjay	21	General	Hindu	A.P.	Telugu	父，母，弟
Vivek	23	OBC	Hindu	U.P.	Hindi	父，母，兄，姉２人，妹
Ritesh	21	OBC	Hindu	U.P.	Hindi	父，母，姉２人，兄２人
Shahid	21	General	Hindu（don’t follow）	Kerala	Maliyalam	父，母，姉２人
Mukesh	22	OBC	Hindu	U.P.	Hindi	父，母，妹２人
Ranbir	23	SC	I don’t care	Jharkhand	Hindi	父，母，弟２人
Salman	20	OBC	Hindu	Jharkhand	Hindi	父，母，妹２人
Ravi	21	General	Hindu	U.P.	Hindi	父，母
Hemant	22	General	I don’t care	U.P.	Hindi	父，母，兄（他同居の親族あり）
Rakesh	20	General	Hindu	Bihar	Hindi	祖母，父，母，姉２人，妹２人

２）　Ｔ大学の学生生活の特徴

学生は実際にどのような学生生活を送っているのであろうか。学生たちの語りから，キャンパスでの生活に関わる規則，授業，学生間および学生と教員間の関係について，以下のような特徴が明らかになった。

① 厳しい規則

大学生活について尋ねると，学生のほとんどが大学の規則の厳しさに閉口していた。まず，服装の決まりとして，男子は革靴にシャツとスラックス，女子は，インド女性の民族衣装であるパンジャビースーツを着用しなければならず，ジーンズ着用は禁止されている。教員も女性であればサリー，男性は大学名の刺繍の入ったシャツにネクタイと決められている。さらに男子であれば，髭を手入れしている必要がある。学生は教員に毎朝チェックされ，一つでも問題があるとキャンパスの中に入ることはできない。一度校内に入れば，校外に出ることができるのは昼休みだけで，後は放課後を待つ他ない。携帯電話の所持も禁じられている。校内にはビデオカメラが設置され，男子学生と女子学生が，授業に関することや用事以外で話すことは禁じられており，食堂で同席することもできない。このような校風に対しては，「北インドではあり得ないが，南インドでは普通である」「（南インドでも）他の大学ではこんな規則はない」と不満を持っている学生が多い。

② 授業について

学生の多くは授業について，教員の授業を行う能力不足の問題を指摘していた。多くの教員が修士課程を修了してからすぐに教員となった若い教員であり，教育経験に乏しいこと，そのため，授業は教員がテキストを板書することに終始しているという問題を挙げている。学生は単位取得に不可欠である75％の出席率を維持するために授業に出席しているが，授業に出ることに対して意義を見出せないという学生は少なくなかった。

Ｔ大学の教員は，授業開講期間中の平日は９時から４時まで，大学構内で勤務することが義務付けられている。出勤時と退勤時に指紋認証の機械で，その時刻を記録される。学科長など役職についてない教員は研究室を持たず，学科ごとに一つの部屋があり，各教員にはパーテンションで区切られた一畳より狭いくらいのスペースに机と椅子がおかれ，採点や授業準備を行っている。

③ 学生の出身地について

Ｔ大学の特徴として，学生の北部出身者の高い比率をあげることができる。教員は，タミルナドゥ州をはじめ南部出身者の割合が高いが，学生は大学のあるタミルナドゥ州近隣の南部の出身者以上に，北部出身者の割合が高い。工学系の私立大学の拡大が最初に進行したタミルナドゥ州など南部の私立大学に，政府立（国公立）大学に入学するほどの成績を得られなかった北部出身の学生の多くが進学している。大学の授業は英語でなされるが，その他学内での会話は北部出身者の多くがヒンディー語を使用し，地元出身者はタミル語を使用している。

生活を送る上で，学生にとって出身地の違いは大きな意味をもっている。北部出身の学生は，言語やその他習慣が異なる南部で暮らすことの不自由さや困難を感じている場合もある。学生の多くは，入学した年は大学の寮で生活している。学年が上がると，寮生活の不自由さと年々寮費が値上がりし高くなっていることを理由に，寮を出て，大学近辺に友人と共に部屋を借りて住む学生がほとんどである。この際に，同居をするのは出身地が近い者同士である。同居する「ルームパートナー」はたいてい，寮生活を共にした仲間の中から気が合う者同士で構成されている。学生は毎日朝９時から午後４時まで大学で過ごすため，生活の大半は家と大学の往復となっている。多くの場合，各人が個別に自分の部屋を有しているわけではないため，一人になる時間は少なく，家事や食事なども同居人と協力して行い，多くの時間を共に過ごしている。

３）進路選択について ── 学生の語り ──

ここからは，進路選択に関する学生たちの語りを，誰が何についてどのようにその選択，決定に関わったのかという観点から考察を行う。なぜなら，進路選択という人生における重要な決定は，助言や支援といった形で誰かが関わる場合がほとんどであり，そこに選択，決定をする若者の社会関係が表れていると考えられるからである。

① 工学系を選択した経緯

大学の専門の決定は，学生の卒業後の進路に大きく関わるため重要である。インドの学生たちには，どの学部を卒業するかが，就職の有無に関わってくると明確に意識化されている。そのことによって，工学部や医学部といった特定の学部に対するイメージが学生の親や周囲の人々，本人によっても共有されている。そのため，学部の選択，決定は学生本人の興味関心や成績だけでなく，直接的，間接的に親やその他の人々の意見を受けて，決定されることもある。

＜事例１　Ranbir＞

筆者：工学部に行くことについては，あなたが決めたの？

Ranbir：12年生[4]をしていたときに，工学部に行くって決めたよ。友達がＣ市に移住して，そこで何を（勉強）しているかをきいたら，「エンジニアリングをしている（工学部で勉強している）」って答えた。どこの大学かをきいたら，Ｔ大学と教えてくれた。

筆者：あなたがここに来ることを決めたってこと？

Ranbir：そうだよ。お父さんにＣ市に行きたいって言った。これは僕が決めたことだよ。

筆者：そしたら，「いいよ」って？

Ranbir：お父さんも僕に工学部に行ってほしかったんだ。僕のお父さんの夢だった。（兄弟）３人ともが「エンジニアになる」ことが。

筆者：お父さんの夢を叶えたんだね。

Ranbir：（笑）もう，最終学年まできたよ。

＜事例２　Bhuban＞

筆者：なぜエンジニアリング？

Bhuban：僕の父の選択だったからですね。父は最初，僕に軍隊に入って欲しがっていました。僕の体格もいいし。でも，母がそれ以外のことをした方がいいって。僕の友達のほとんど工学部を選択していたから。クラスメートも40~50人いたけれど，38人が工学系を選択していました。それで，12年生のあとに１年間（工学系進学のための）準備をして，入学しました。

筆者：あなたにとっては，工学系のコースに行くことが自然だった？

Bhuban：そうです。

筆者：他に，興味がある分野があった？

Bhuban：いや，これでよかったです。10年生からずっと工学系に進学するために準備をしてきたから。母も，おじさんも「エンジニアリングをするように」って言っていたから。

筆者：アドバイスを受けた？ それとも，強制された？

Bhuban：強制されました。その当時は，僕が唯一村から，エンジニアを目指していたから。

筆者：大きな期待を背負っていたんだね。

Bhuban：そうですね。

筆者：プレッシャーがあった？

Bhuban：そんなことはないですよ。

＜事例３　Abhishek＞

キャリア選択のことだけど，12年生が終わった時点で，インド人は２つのキャリアについてだけ考えはじめる。工学部か医学部か。インドでは工学系の大学がどこでもあるから，入学するのは難しくない。でも，良い工学系の大学に入るのは難しい。「エンジニア」ってきくと，聞こえがいいから（well and sweet），みんな工学系に行きたがる。医学系の大学は少ないし，競争率がとても高い。ラジャスターンのＫというところにとても有名な予備校（コーチング）があるけど，そのための学費も１lak[(5)] する。貧しい人にはどうにもできない。医学コース（MBBS = Bachelor of Medical and Surgery）をしたければ，私立大学もあるけど学費が25laks かかる。貧しい人には無理。だから工学部に行く。競争が激しく，学費も高い。そして医学部は５，６年かかる。それから研修医になる。10年後には医者になるけど，誰がそんなに時間をかける？ だから工学系に行く。理学部（BSC = Bachelor of Science）だと３年だけど何もならない。だったらもう１年かけて工学部に行けば，市場から何かしら得られる。だから，みんな工学系に行く。そういうわけで，多くの人にとってのキャリア選択は，工学系になる。その次が医学部。

＜事例４　Salman＞

筆者：12年生当時，（大学での）専門を選ぶのが難しかったですか。

Salman：いえ，難しくなかったです。システムがありますから。学校で成績が良い人は，工学系に

行くと決まっています。僕の場合もそんな感じで，工学部に行くことは決まりました。でも，良い工学系の大学に行けなかった。僕はいつも両親に工学部に行くって言っていたので，他のコースに行くとは言えないし，理学部に行ったら，将来の可能性がない。なんとかして工学系の大学にいかなければならなかった。そうしてＴ大学に入ったけれど，結局キャリアは期待したようにはよくなかった。それで，GATE[(6)] の試験を受けることに決めました。

大学進学時に工学系という専門を選択した経緯について，その決定が誰によるものであったかを学生に尋ねると，「自分で決めた」という回答が多い。進路選択を自分で行ったという学生が「親が選択を自分に任せてくれたことに感謝している」というように，自分で専門を選択，決定することが当然であるとはいえず，そうしたなか，自分自身で行う決定に価値を認めている発言もきかれた。少数の学生は，不本意に親の意向で専門を決定されたという意識をもっている。また，「＜事例４＞の Salman のように，「成績がよければ工学系という進路が当然となってくる」という発言の「成績がよい」というその範囲はかなり幅広いようである。少なくない学生が，中等教育段階で学校だけでなく，予備校に通っており，中には地元の学校に籍を置きつつも，実際には親元を離れて進学準備のためのプライベートの機関に通っていた学生（表における Hemant）もいた。多くの学生たちは，最終的には自分で工学系という専門を決定したという意識をもっているが，その場合であっても，成績次第で専門がある程度決まってくる状況や，親が強制はしなくても，親の意向をくみ取って決定している状況がある。学生の多くには，叔父や従兄弟といった親戚に工学系に進学した経験のある者がおり，その存在が工学系という専門の選択に影響していると考えられる。

インドではどの学部を修了するかが，就職の有無に直接的に関わっているという意識を学生とその親は有しているといえる。「工学系の学生の中には文系の専門に進みたいけれども，家庭が裕福でないために文系は選択できない人もいる」といった学生の発言からうかがえるように，高等教育機関に進学することとが，そのまま仕事に結びつくとは考えられているわけではなく，何を専門とするのかが重要であると考えられていることを示唆している。

以上から，調査を行った大学生の場合，工学部という専門の選択は自分で行ったと考えている者が多く，少数だが親から強制されたと感じている者もいる。しかし，インドの人々にとって就職に結びつく学部である工学部，医学部を選好する意識は強く，学生にとっては，自らの興味関心とは別の基準で考えた場合，工学系という選択が「当り前であった」という状況がみてとれる。

② Ｔ大学を選択した経緯

Ｔ大学に通う学生の多くは北部出身者である。北部インドからタミルナドゥ州は遠く離れており，前述のとおり，言語，食生活など習慣の違いも大きい。北部出身者はどのようにして，タミルナドゥ州の大学に来ることを決めているのであろうか。また，その中でも大学の選択はどのようにして行っているのであろうか。

＜事例５　Ravi＞

筆者：どうやってこのＴ大学を知ったの？

Ravi：広告を通して知りました。ヴァラナシ（ベナレス）で広告を見つけました。

筆者：あなた自身が探したの？

Ravi：そうです。新しい大学だったから。新しい大学だと，集中して見てもらえるでしょ。そうするとより多く学習する機会が得られる。もし，いい大学に入れなかったら，こういった方向にいった方がいいと思います。人とは違ったふうに考えないと。カルナータカ州の大学にも受かったけれど，すごく学費が高かった。…。インドでは工学系で勉強するのに良い大学は，IIT(7) しかない。もしIITに入れなかったら，お金をかけて勉強する意味はない。それなら（学費が）安い方がいい。安くはないけれど，まだよかった。

＜事例６　Salman＞

筆者：どうやってＴ大学のことを知ったの？

Salman：当時，僕はどこかの工学系の大学に行かなければいけないっていうプレッシャーがありました。それで，多くのインド国内の大学に応募書類を送りました。受かったのは，マディヤプラデーシュ州とかベンガル州の大学でした。Ｔ大学も受かった大学のうちの一つで，その中で最初に面接に呼ばれました。それで，書類を提出しました。最初に連絡があった大学だったので。

筆者：自分で大学を探したの？

Salman：はい。

筆者：両親ではなく？

Salman：両親は村の出身です。こういうことについてはあまり知らない。自分で探さないといけなかった。自分でできることをやりました。

筆者：誰か親戚とかは？

Salman：いえ，いないです。

筆者：なぜエンジニアリングをするというプレッシャーがそんなにあったの？

Salman：10，12年生の後，誰にとっても何かしなければ，稼がなければという責任が生じます。キャリアを安定させなければというのがあります。僕の身近には工学部がありました。10年生の後に，僕の従兄弟の息子が工学部に行くために準備を始めていましたし，僕の母方のおじもエンジニアでした。経済系や文系は少し（レベルが）低いコースというか，それほど稼げないし，キャリアで上にいけない。12年生修了で就職するのは難しい。工学部で勉強をするには良い大学にいかなければならない。そのことでプレッシャーが大きかったんです。良い大学に入るには厳しい競争があるから。言ってみれば，僕も良い大学には入れなかったわけですが。NIT(8)，IITといった大学には入れませんでした。それでＴ大学に来て，今はGATEの試験のために準備しています。

筆者：母方のおじさんはエンジニアですよね？ アドバイスを受けている？

Salman：あまりそういうことはないです。「こういうふうにしないといけない」っていうシナリオを

受け取っているだけです。それでもよかったと思います。エンジニアや医者よりも良い選択肢はないと思うから。生物学が好きでなかったので，経済系か工学系しかなくて，工学系を選びました。

大学の選択に関しては，ネットや新聞広告を見て，本人もしくは親が行ったというのが大半である。このことから，身近な知り合いや親戚に高等教育機関の情報に通じている者が少なく，人づてで情報を得ることが難しい状況があると考えられる。北部出身の学生の場合，南部に定住している親戚がいるという者はいなかったが，近所の人や兄弟など同世代の知り会いがＴ大学に通っており，その情報を基に大学を選択したという者もいる。工学系を選択したことに対して疑問を感じている学生は少なかったが，大学の選択については，選択時に情報を十分に得ていなかった，もしくは，親に決定されてしまった，など後悔の気持ちを口にする者も少なからずいた。

学生は工学系という専門の選択については，成績や自分の周囲の人の学歴や職業から考えて，その選択をある程度当然のものとして認識している。しかし，工学系に進学しても一流と考えられている限定された大学に入学できなければ，良い就職は期待できないという意識を学生はもっている。それでも，他の専門に比べるとまだ就職がありそうだと期待できる工学部を選択している。大学の選択については，私立大学が急増するなかで，本人や親にとっては親戚などコネクションを利用した情報収集が難しいなか，ネットや新聞の広告を通じて，あるいは稀には人づての情報を頼りにして行っている場合が多い。

③大学卒業時の進路選択について

インタビューを行った時期は，学生にとっては最終学年の前期の試験前であり，就職活動が本格化する時期であった。学生にとって，就職のチャンスが大きいのは，大学に訪れた企業による試験や面接を経て内定をもらうオンキャンパスとよばれる手法である。オンキャンパスで内定をとることができなかった学生は，オフキャンパスといって個別に求人サイトを利用して就職活動を行うことになる。この場合，企業は経験者を求めるために，新卒者が内定を得ることはかなり難しいという。インタビューを行ったのは，例年なら大学に企業が訪れる時期（９月）であったが，当時まだ一社も大学にオファーがない状況であり，就職について学生はかなり厳しい見方をしていた。

＜事例７　Ravi＞

筆者：大学生活についてどう感じている？

Ravi：いいですよ。…プレッシャーが大きくて。今現在は，僕たちは100％以上のプレッシャーにさらされています。将来何をするのか。３年生までは，とても楽しい。映画に行くとか，いろいろできます。普通学生がしていることです。でも今は，GATE（対策）をしている人，学外で就職活動（オフキャンパス）をしている人。そんなところです。今はお互いに一緒に過ごす時間が少ない。プレッシャーの下にあります。将来について考え出したからですね。今スタートしなかったから，工学系で卒業したら大変です。もし二年後に大変になるなら，今苦労した方がいい。工

学部を卒業して何も仕事につけなかったら，大きな社会的なプレッシャー（social pressure）がかかってきます。今がんばる方がいい。これはインド人みんなに共通の考え方だと思います。世界中でもですね。

筆者：工学部で勉強した学生は，就職できるという期待があると感じる？

Ravi：もちろん。昨年から，家族に聞かれていますよ。どうなっているかって。良い大学では，内定が（placement）が出ていますよ。でも今年は，（自分の大学では）何の情報もきていない。

筆者：不況のだから？

Ravi：そうですね。それで困っています。そのことが，影響していますよ。毎年工学系を卒業する学生はいるわけだから，これからは後輩とも競争しないといけないです。

新卒での採用が見込めない，また採用されたとしても待遇に満足できないといった理由から，進学を目指して大学とは別の受験対策の学校に通いながら，準備している学生もいる。Graduate Aptitude Test for Engineering という試験を受け，一流校の修士課程に入学することを目指すためである。また，卒業後に就職を目指す学生の多くも，数年働いて，教育ローンを返済する，もしくは進学のための費用を貯めた後には，修士課程に進学することを希望しており，昇進のための修士の学位を取得する必要性をほとんどの学生が意識していた。

早く就職をして自立をしたいという思いと，良い待遇のために進学をしたいという思いの両方を多くの学生がもっているが，どちらの進路を選ぶのかは，必ずしも家庭の経済事情によるとはいえないようであった。

＜事例８　Shahid＞

筆者：進学については考えている？

Shahid：もちろん，仕事がみつからなかったら，進学してより良い機会に期待するしかないよ。

筆者：まずは，仕事に就くことの方が，優先？

Shahid：進学は，就職できないっていう場合だね。今，父に進学をするって話をすると，彼が学費を出すことになる。仕事をしてから進学するのは，自分で学費を出すわけだけど。それは大きな違いだよね。

筆者：卒業まで，何か計画はある？ ますは，実習（プロジェクトワーク）だよね？

Shahid：（仕事は）大学を通じた内定（キャンパスプレイスメント），これで決まればいちばんいいよ。これで選ばれることがあれば，最高だね。自分から外に出て行って（活動する）っていうことになると，もっと大変になる。彼らが大学に来る場合は，人が必要だから（採用に）来ているわけで基準は低い。この場合は，外に行って自分で探すより良いチャンスに恵まれているってことになる。今からの計画は，まずプロジェクトワークをして，キャンパスプレイスメントを受ける。その先は，自分次第。

＜事例９　Rakesh＞

筆者：GATE の準備をしているけれど，（進路の）優先順位は？

Rakesh：工学部の修士課程に行きたいです。IIT の修士課程です。もし無理なら，トップレベルの政府系企業に入ります。

筆者：プライベート（の企業）はいや？

Rakesh：いやです。いつでも首切りにありますからね。プライベートの企業自体が少ないんです。IT 企業は知識が要らない代わりに，すぐに捨てられます。

筆者：大学を通しての就職（オンキャンパス）にはどれくらい期待していますか？

Rakesh：何とも言えないです。この大学のことは，１年生のときから信頼していません。自分でするしかないです。

筆者：卒業後のことを，どのように考えていますか？

Rakesh：GATE の準備をしていますが，（IIT に入学するための）足切りの点数が取れなければ，もう１年かけてやりたいと思います。IIT に行きたいからです。IIT に行くことは，すべてのインド人にとっての夢です。今年足切りの点数に満たなかったら，デリーにいきます。M という予備校（コーチングセンター）に行きます。

筆者：両親にはそのことを話した？

Rakesh：今のところまだ両親に話していませんが，話せば同意してくれます。僕は一人息子だから。両親を信じています。

筆者：そうか，がんばってね。工学系の学生にとって IIT は何がそんなにいいの？

Rakesh：IIT は本当に知識に基づいた機関なんです。講義の録画を見ますが，教員の知識があります。例を出して，基礎から教えて，独自のスタイルがあります。機械もそろっています。何百万もするものもあります。経験のある教員ばかりです。IIT で Ph.D をとった教員がほとんどです。

学生にとっては，国立大学を頂点に，政府立大学，私立大学といった高等教育機関の序列は明確に意識されている。大学での勉強の内容と大学に対する外の人々からの評価の点で，不本意なまま学業を終わらせたくないという気持ちと，うまくいけば良い就職ができることへの望みが，学生の進学を希望する動機となっている。

調査をした男子学生たちの出身家庭は，私立大学の学費と生活費を何らかの形で支出できるだけの経済力を有している。しかし，本人とっても親にとっても，急速に変化する教育システムや労働市場の事情を理解し，対策を取ることは難しい。それでも，高い学費を払って工学系の学位を取得する子どもの就職に対する親の期待は依然として大きいようである。

＜事例10　Salman＞

筆者：悩み事や問題があるときは，誰に相談しますか。

Salman：近しい友達です。ルームパートナーや，従兄弟です。母にも相談します。

筆者：従兄弟は故郷にいるんですか。

Salman：いえ，ビハール州にいます。彼も工学部で勉強しています。高校が同じで違うクラスでした。彼も今（大学）最終学年です。よく話します。

筆者：従兄弟で他に工学系の人は？

Salman：他にはいません。

筆者：他に話をする人はいますか？

Salman：従姉妹もいますが，そんなには話をしません。両親にも話しますが。もうすでに決めないといけないことは決めたので，GATE の試験をパスするだけです。あとは，僕が自分で何をするべきか決めるだけです。両親は心配していますが，「私たちには分からない，自分で決めなさい」というだけです。僕がやっていることを知らないですから。彼らは，（大学のある）C 市に来たこともないですから。

筆者：大学の先生には？

Salman：先生には話しますよ。彼らは学生がどういうことを経験しているかを知っていますから。そういうことは，一般的にききます。キャリアカウンセラーはいますが，あまりプロフェッショナルではないです。

急速に変化する教育や就職の仕組みに対応することを迫られる学生たちは，「名の知られていない工学系私立大学出身者である」ということが，社会の中で，特に労働市場でもつ意味を親世代と共有することができていない。そのため，学生の多くは，進路に関する相談は友達やいとこ，エンジニアとなっている親せきを頼りにしている。インタビューを行った学生のほとんどは，毎日もしくは一日おきに親と電話で連絡を取り合っている。教育や就職に関しては，親世代の知識や理解をあまり期待できないが，それでも親や親せきを「相談できる相手」と考えているのである。

４．インドにおける若者の進路選択にみる社会関係

今回調査を行ったインドで工学系の私立大学に通う男子学生の場合，高等教育での専門の選択は，自分で行ったという意識をもちつつも，成績，経済力，親戚の学歴や職業から判断して，選択すべきコースを見出しやすい状況があったと考えられる。工学系という専門の選択は，学生本人の興味関心以上に，親や親せきとやりとりの中で決定されているといえる。しかし，学生やその家族にとって，私立大学の増加という高等教育における新しい事態をふまえ大学の選択を行わなければならないということは，親戚や出身地におけるコネクションを利用することが難しい状況を意味する。その結果，大学選択に関しては，ネットや新聞といったメディアの情報にのみ頼らざるを得ない状況があったとみられる。調査を行った北部出身の若者の多くはコネクションもなく南部にやってきて学生生活を送っているが，利潤追求を重視する大学の態度に失望するとともに，その大学に通っていることで受ける外部からの評価に対してもフラストレーションを抱えている。

学生や親にとって，私立大学が増設される中での大学の選択や，新興産業における就職といった「未経験の選択肢」に直面する中での選択・決定に際しては，これまで頼りにしてきた社会関係をあまりあてにできない状況がある。こうした局面で若者が頼りにする社会関係がいかなるものであるのか，大学卒業後の進路に関しても明らかにしたい。筆者は現在学生たちが行っている，工学系の学生が最終学年の最終学期に行う企業実習（プロジェクトワーク）についても，インタビュー調査を継続している。この企業実習を通じて得た社会関係は，学生の進路選択においてどのような意味をもっているのであろうか。また，今回，十分に明らかにことができすることができなかったが，学生生活を送る上で，「ルームパートナー」と彼らが呼ぶ同居者や，共に進学塾に通う，就職活動を行う仲間集団が彼らの生活において果たす役割についても，今後，観察及びインタビュー調査を行っていきたい。

註

（1） 筆者はインド都市社会で路上生活経験のある若者を対象としたこれまでの研究で，進路選択など個人が自ら選択・決定をしたという意識をもって語る「自己決定」が，当人と共同性を有する他者の支援や助言によって成立していることを明らかにした（針塚 2011）。本稿において若者の進路選択を検討することで，若者が何について誰の支援や助言を受けているかを明らかにし，さまざまな状況の若者が「自己決定」する場面を比較し，若者の社会関係のあり様を検討することにつなげていきたいと考えている。

（2） UGC は，1956年11月に設立されたインド政府の政策機関である。インドの大学教育における基準を決定している機関。

（3） インタビュー調査の概要

調査期間：2011年９月，2012年３月，2012年９月の合計18日間。

調査の方法：T 大学の大学生・教員へのインタビュー調査。

T 大学，大学生・教員の家庭への訪問調査

インタビュー調査対象者：T 大学に通う最終学年の男子学生15名，T 大学の学長，教員４名

インタビュー調査の時間：１人につき20分～70分，１回～複数回行った。

インタビューは主に英語（場合によってはヒンディー語）で行った。

（4） インドの教育制度において，８年生までが義務教育，10年生で前期中等教育修了，12年生で後期中等教育を修了する。

（5） 2013年２月現在，１ルピーは1.7円。１lak は10万ルピー。

（6） GATE とは Graduate Aptitude Test for Engineering の略称。学士レベルの工学の知識，技術を試す試験。この試験の点数が，進学，就職の際の合否，採用の判定基準となる。

（7） IIT とは Indian Institute of Technology の略称。インド国立の工科大学。インド全国に15校（建設中も含む）ある。入試の受験倍率は60倍とされる。

（８）　NIT とは National Institute of Technology の略称。インド州政府立の工科大学。

参考文献

Craig Jeffrey 2010, TIMEPASS Youth, Class, and the Politics of Waiting in India, California: Stanford University Press.

Craig Jeffrey, Patricia Jeffery and Roger Jeffery 2008, Degrees without Freedom? Education, Masculinities and Unemployment in North India, California: Stanford University Press.

Pawan, Agarwal 2009（2010）Indian Higher Education: Envisioning the Future, New Delhi: Sage Publication.

Prakash Ved（Ed.）2011 University and Society: Issues and Challenges University Grants Commission.

University Grants Commission 2012 Higher Education in India at a glance, New Delhi.

University Grants Commission 2011 Inclusive and Qualitative Expansion of Higher Education 12th Five – Year Plan, 2012-2017, New Delhi.

A. ファーロング / F. カートメル　2009「若者と社会変容　リスク社会を生きる」大月書店。

針塚瑞樹　2011　九州大学大学院人間環境学府学位請求論文「インド都市社会におけるストリートチルドレンの「自己決定」に関する研究 ── 子どもと NGO の関係性を中心に ──」。

佐々木宏　2011「インドにおける教育の不平等」明石書店。

インド政府人的資源開発省 HP　http://mhrd.gov.in/

University Grants Commission HP　http://www.ugc.ac.in/Default.aspx

Career Choices and Social Relationships among the Youth in India
Case Study of the Private Engineering College Students in Tamil Nadu

Mizuki HARIZUKA

This Paper examines life styles, sense and social relationships of the youth who goes to private engineering college at Tamil Nadu in India, focusing on their career choices. First of all, I had explained the situation of higher education in India from the viewpoint of privatization in higher education. In addition to that, I tried to make clear the life styles and senses of the students. It is important to understand the meaning of experiences of receiving higher education from their point of view. Main purpose of this thesis is to analyzing the social relationships of youth focusing on their career choices. In this paper, choices and decision making process of students are not seen as totally individual matter. It always proceeds with support and advices of people who has connection to these youth people. There are three concrete points to be analyzed here. 1) How did the students decide to do engineering course, 2) How did the students decide college to go, 3) How do they feel and decide what to do after their graduation.

At first point, most of the students think that it was his decision to do engineering, and few of them think that their parents force them to do so. Their parents and they themselves think that engineering and medical courses are the ones which guarantee for students to getting job. Because of this situation, course choices were not based on each student interest, but based on their scores of examination. If the student could get certain marks, it means that the student are deserves to go for engineering courses. Student doesn't have big difficulty to choose their courses.

At second point, choice of college is mostly based on the information of media like newspaper and internet for both of students and their parents. Because of rapid increase of private institutions for engineering course, it seems to be difficult to get ideas through their social relationship. Compared to choices of courses, decision of college was depended on students themselves.

At last point, when it becomes to job matters, many of students feel gaps with their parents. Their parents have expectations for their child who graduates from engineering course to getting sort of job. But students feel difficulties to getting job because of recession and value of their college. Some of parents tell their child to manage career matter by themselves because of lack of their knowledge. Students are not counting on their parents for career matters. Nevertheless, students keep very frequent contact with their parents and think them as person to talk over.